

| 重点取組分野 | 令和 4 年度 | | 総括 |
|----------------|---|--|----|
| | 具体的取組 | 自己評価結果 | |
| 生きてはたらく知 | ①自ら課題を発見し、主体的に問題解決に向かうとともに、「学習スタンダード」を意識した授業展開をはかり、安心して学習活動に取り組めるようにする。②少人数での話し合い活動等を取り入れ、比較、分類、関連づけなど、思考することをもとに自分の考えをもつ経験を積み重ねる。 | 今年度重点研で主体的な力や伝え合う力を高めてきた。しかしながら、日常的に児童が、活かして生活できるかというところには課題が残る。教職員にも、普段の授業から対話的な取り組みや、授業の展開を学年で話し合い、学び合う姿を意識した授業が行われてきた。継続して取り組むことが必要である。 | B |
| 豊かな心 | ①児童会から提案される「あいさつ運動」を中心に、地域の方などにも進んであいさつする意識を高めていく。道徳・人権の指導を中心に思いやりのある言葉遣いができる子どもを育てていく。②なかよし活動やY-Pを活用しながら、互いに認め合う気持ちを高めていく。 | 児童会提案の「あいさつ運動」を行ってきたことで、挨拶を返すことはできているが、自分から進んで挨拶を行っていない児童も多い。ただ、あいさつ運動を通してその価値に気づく児童もいたため、今後も継続できるとよい。YPを学年で分析し、指導に活かすことはできた。 | B |
| 健やかな体 | ①学校保健委員会では、児童が問題意識をもち、生活・行動を振り返ることができるテーマを設定する。手洗いうがいの習慣や衣服の調節など、自分の健康管理を意識づける。②児童委員会の企画による体力アップ週間や、日常の休み時間の外遊びなどから、体を動かす楽しさを体験させる。 | 手洗いうがいの習慣が身に付き、遊具や校内の歩き方といったルールを継続的に呼びかけたことで、怪我なく健康的な学校生活を意識できた。学校保健委員会で取り組んだリズムジャンプによって、体を動かす楽しさを感じる児童が多く見られた。一方で、まったく外遊びしない児童も一定数はいる。 | B |
| 地域連携 | ①畑、昔遊び、家庭科学習のボランティアをはじめ、マリノス株式会社(キャリア教育)、日産スタジアム、ケアプラザや地区センターなど、社会科や総合的な学習の時間等での連携した学習に取り組む。②学校運営協議会の充実を図る。③地域学校協働本部を立ちあげる。 | 家庭科のミシン学習や地域の畑での作物の収穫などを通して地域の方々と連携して学習を進めることができた。また、横浜FMマリノス(株)と連携した6年生のプロジェクトも半年に渡って行い、中間発表、発表会にも参加していただき、その成果を共有することができた。コロナ禍で実現できない活動もあった。 | B |
| いじめへの対応 | ①「いじめ」の定義を再確認し、小さなことも「かもしれない」の意識をもって関わる。②「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事の場面で活用している。③児童の発達段階に応じて、教科担任制を取り入れるなど複数の教員が関わるチーム学年経営を推進していく。 | 「いじめ」の定義を確認し、積極的認知を行うことで、いじめに対して感度を高く持つことができていた。些細なことでも学年で共有し、話し合うことができた。教科担任制を実施することで、複数の視点で児童を見守ることができていた。 | B |
| 人材育成・組織運営(働き方) | ①育てたい力を明らかにした、「分かる、楽しい、集中できる」授業づくりを学ぶ。②校内メンター研修を全職員でサポート、活用できる体制をつくる。③再現性のある伝達方法を整備する。毎週金曜日に定例の教務会を行い、小刻みに短時間で、具体的な学校運営の方向性を確認できる場とする。 | 重点研やメンター研など、共同研究のあり方や職員の協力体制が構築されており、効果的に機能していた。校内メンター研を通じて、初任者や若手教員が安心して仕事に取り組むことができたが、若手メンバーが自主的に動ける環境作りがさらに必要である。 | B |
| 教育環境整備 | ①施設、設備、教材・教具の安全性と消耗度合いを点検し、優先順位を考え、計画的に適切な補修や更新を行う。②ICT機器を有効に活用できるよう、校内のネットワーク環境を改修し、快適な学習環境づくりに取り組む。 | 各教科、行事等の備品の管理場所が不明瞭であり、その在庫や管理状態もしっかりと把握できていない。備品やデジタル教材の効果的な活用がされていないと感じる。 今後、備品の管理場所を整理して、カリキュラムに合わせた効果的な活用をしていきたい。 | C |
| 児童指導 | ①「しろさとっ子のきまり」を職員会議等で共通理解を深め、全職員が同じ基準で児童指導にあたる。②年3回の学校生活アンケートをとり、専任等の複数の目で見守りながら、担任ひとり抱えることなく、Y-Pを活用して児童の気持ちに寄り添う支援を学年で考える。 | きまりを学年で共有しながら、同じ基準で児童指導ができるよう努めた。細かいところで、曖昧なところがあるため、毎年確認と実態に応じて見直しをはかることが必要である。生活アンケートやYPを活用して学年、専任が連携し児童理解に努めた。YPの成果が感じられるまではもう一歩と感じている。 | B |
| 特別支援教育 | ①個に応じた支援をするために、特別支援教育の視点をもった授業づくりを意識して教育課程編成に取り組む。②職員研修を通して、ユニバーサルデザインやインクルーシブ教育の考えを取り入れた授業を組み立て、スキルアップを図る。 | 個別に支援が必要な児童を学年研やケース会議で共有したり、いちょう教室と連携したりして個に応じた支援に取り組んだ。今後、インクルーシブ教育に向けて、一般級における特別支援の具体や授業づくりについて、研修を充実させて更なるスキルアップを図る必要がある。 | B |
| ブロック内評価後の気づき | 小中ブロックでの定期的な話し合いをすることで繋がりが課題の精選に繋がっている。小中の学校行事に関連を持たせ、継続した取組となっている。コロナ禍活動の自粛となっていたことが徐々に再開し、これからの生徒の成長に活かせるようになることが課題である。今後についても有効な小中ブロック教務会を実施し、年間を通じた小中連携の強化を確認することができた。 | | |
| 学校関係者評価 | コロナ禍の状況をみながら、学校が地域との関わりについて再構築しようとしていることに高評価を得ることができた。学校運営協議会委員の方々には、「授業参観や運動会、卒業式を参観いただき「落ち着いている」「可愛い」「保護者もマナー良く参観している」と評価を得ることができた。PTA主催ではあるが、3年間で中止となっていた「しろさとフェスティバル」の再開を熱望されているので、今年度末より、PTA役員と学校が準備を始めた。地域を大事にする学校として、今後も地域に開かれた教育課程を目指していきたい。 | | |
| 中期取組目標振り返り | 過去3年、コロナ禍で教育活動が制限される中、感染措置を講じつつ宿泊体験や出前授業を継続するなど、本校では児童らの学びや活動を止めない工夫を行ってきた。そして今年度は、制限が緩和され、校外学習はもとより、家庭科や生活科・総合的な学習の時間において地域の教育力を大いに活用し、児童らの生きた学習を実践することができた。地域行事は完全に復活はしていないが、来年度の復活を機に、さらに地域と連携して教育活動の幅を広げていきたい。また、教育環境の整備が整っていない課題を克服すべく、今後、備品の管理場所を整理して、カリキュラムに合わせた効果的な活用をしていきたい。 | | |

| 重点取組分野 | 令和 5 年度 | | 総括 |
|----------------|--|--------|----|
| | 具体的取組 | 自己評価結果 | |
| 生きてはたらく知 | ①「しろさとっ子タイム」において、「学習スタンダード」を意識した学習の振り返りを行い、安心して学習活動に取り組めるようにする。②少人数での話し合い活動等を取り入れ、比較、分類、関連づけなど、思考することをもとに自分の考えをもつ経験を積み重ねる。 | | |
| 豊かな心 | ①児童会から提案される「あいさつ運動」を中心に、地域の方などにも進んであいさつする意識を高めていく。道徳・人権の指導を中心に思いやりのある言葉遣いができる子どもを育てていく。②なかよし活動やY-Pを活用しながら、互いに認め合う気持ちを高めていく。 | | |
| 健やかな体 | ①学校保健委員会では、児童が問題意識をもち、生活・行動を振り返ることができるテーマを設定する。手洗いうがいの習慣や衣服の調節など、自分の健康管理を意識づける。②児童委員会の企画による体力アップ週間や、日常の休み時間の外遊びなどから、体を動かす楽しさを体験させる。 | | |
| 地域連携 | ①昔遊び、家庭科学習のボランティアをはじめ、マリノス株式会社(キャリア教育)、日産スタジアム、ケアプラザや地区センターなど、社会科や総合的な学習の時間等での連携した学習に取り組む。②学校運営協議会の充実を図る。③地域学校協働本部と一年を通して協力体制を充実させる。 | | |
| いじめへの対応 | ①「いじめ」の定義を再確認し、小さなことも「最悪の事態は」の意識をもって関わる。②「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事の場面で活用している。③児童の発達段階に応じて、教科担任制を取り入れるなど複数の教員が関わるチーム学年経営を推進していく。 | | |
| 人材育成・組織運営(働き方) | ①育てたい力を明らかにした、「分かる、楽しい、集中できる」授業づくり・環境づくりを学ぶ。②校内メンター研修を全職員でサポート、活用できる体制をつくる。③再現性のある伝達方法を整備する。毎週定例の教務会を行い、小刻みに短時間で、具体的な学校運営の方向性を確認できる場とする。 | | |
| 教育環境整備 | ①施設、設備、教材・教具の安全性と消耗度合いを点検し、優先順位を考え、計画的に適切な補修や更新を行うことで、カリキュラムに合わせて効果的に活用できるようにする。②ICT機器を有効に活用できるよう、校内のネットワーク環境を改修し、快適な学習環境づくりに取り組む。 | | |
| 児童指導 | ①「しろさとっ子のきまり」を全職員で共通理解し同じ基準で児童指導にあたる。②年2回のY-Pを活用して児童の実態や気持ちの変化を見取り学級経営に活かす。③年3回の学校生活アンケートの結果を学年全体で共有し専任等の複数の目で見守り担任ひとり抱えることなく体制づくりを行う。 | | |
| 特別支援教育 | ①個に応じた支援をするために、特別支援教育の視点をもった授業づくりを意識して教育課程編成に取り組む。②職員研修を通して、ユニバーサルデザインやインクルーシブ教育の考えを取り入れた授業を組み立て、スキルアップを図る。 | | |
| ブロック内評価後の気づき | | | |
| 学校関係者評価 | | | |
| 中期取組目標振り返り | | | |